

そっとしておく思いやり

言葉は人間が生み出すものです。したがって、生み出された状況というものが必ずあるはず。しかし、言葉だけではその状況がよくわからない場合があります。その典型的な例が次の言葉です。「親切という名のおせっかい そっとしておく思いやり」

これは、私がよく引用する相田みつを氏の言葉です。「親切がどうしておせっかいなんだ？ 思いやりがあれば、人に関わってあげるべきでは？」と思いがちですね。この言葉が、どういう状況を指して生まれたものであるのか、それが大切なのです。

今日は私立高校の推薦入学試験の結果発表日です。これを皮切りに入試結果が今後発表されていきます。公立高校の入試発表は来月ですので、三年生にとっては緊張の連続ですね。

高校入試は全員が合格することはまずありません。「合否」という言葉通り、不合格者もいるはずです。そこが肝心です。結果発表があった時には、本人ではなく、それを取り巻く周りの者たちの言動が重要になってきます。

「今日の結果発表に関係のない生徒は、すぐに下校なさい」と三年職員は言うでしょう。「なんで？ 合格したら一緒に喜んであげたいし、ダメだったら慰めてあげたいから待っていたい」と考える人はいませんか。待つか待たないかだけでなく、心配するあまりすぐに「どうだった？」と尋ねたりメールしたりすることも同じです。これが「親切という名のおせっかい」です。

人生で初めて受験（検）を経験し、初めて目の当たりにする結果については、合否にかかわらず、本人にしっかり受け止めさせなければなりません。それが受験（検）というものです。特に、不合格だった場合は、慰めの言葉より、少しでも早く本人に気もちの切り替えをさせるべきです。

それに、慰めになると思っているのは周りの者だけであり、不合格を突き付けられた者にとっては慰めになりません。自分勝手に思いをめぐらし、相手の都合は二の次になっています。「悲しんでいるだろうから励ます」「見優しそうに思えるこの考えは、場合によっては、悲しむ仲間の心に土足で無遠慮に入り込む行為になります。「彼の結果はどうだったのだろう。気にはなるが、今は尋ねないでおこう。現実を受け止めるのは彼なのだから。落ち着いたらそれとなく聞いてみよう。」

これは「察する」ということです。仲間を心配しながら、その子にとつて何が大切かを考えています。そして、自分の行動にブレーキをかけています。これが本当の「思いやり」です。「そっとしておく思いやり」……名言だと思いませんか。これまた『少年の日の思い出』に登場する母親そのものですね。

(二月一日記)

親切という名のおせっかい
そっとしておく
おもいやり
みつを